噴煙
第22号
阿蘇市文化協会
広報委員会
〈印刷所〉
つるばやし印刷

新年のご挨拶

阿蘇市文化協会
会　長
山部　七生

人々を震撼させた熊本地震。あれから九カ月、まだまだ余震が終わらないうちに阿蘇山の大噴火。大量の火山灰が宮地地区を中心に降りそそぎました。復興・復旧へ向かって大きな第一歩を踏み出した矢先の出来事で自然の脅威を見せつけられた感じがいたします。山々には幾千か所に崩落の跡が見られ寸断された道路や線路、長雨や大雨が降るたびに危険と隣り合わせの生活が続くものと思われます。

この中におきまして文化協会の活動もままならず、一部変更や先送り等のやむなきに至りました。深く責任を感じています。このような非常時に迎えました新年、心から〝おめでとう〟とは言えませんがお互いに努力を重ね手を取り合って苦難の途を乗り越えて幸せを勝ち取りましょう。

皆々様の更なるご健勝をお祈り致します。

頑張ろう阿蘇市！

ステージ委員長
吉田紀美代

希望の年に!!

私事ですが昨年十一月六日、夫が永眠致しましたので年頭のご挨拶、失礼させて頂きます。入院看護の為「復興祭」にも参加協力が出来ませず本当に申し訳なく思っております。

昨年は、近年経験したことのない大地震に見舞われ、その被害は想像を絶するものでした。家庭生活も社会生活も大きく影響を受けました。復興の道のりは未だまだ遠い様です。また阿蘇山爆発による降灰の被害も加わりました。今年こそ希望の年であってほしいと願っております。復興の途上でもある今、私達は心を強く奮い立たせねばなりません。それには心の拠り所「文化の力」が必要です。各グループ活動を通して心を支え合いながら一歩一歩希望の道を進んで行きたいと思います。今年は会員の皆様の二年分の力を合わせて、より充実した文化祭が開催できます事を祈念し、これから楽しみながら、健康にも気を配って精進したいと思います。

展示委員長
岡本　芳郎

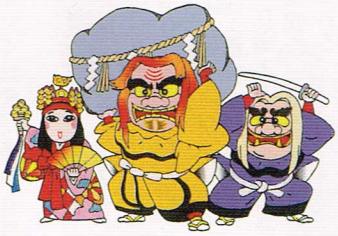
新年を迎えて、今年こそは良い年であります様にと願い、又、文化協会も立派な行事、文化祭が出来る事を願っているところです。

展示者の方々の努力により素晴らしい作品が出来ることで、若い人へと文化協会が受け継がれて行く様、今の内にやれる事を精一杯皆様と気持ちをひとつにして頑張りたい。各クラブ及び学習会に、出むき交流の場を作りながら、会員が増えればと思います。

皆様の一年が良い年に成ります様に願います。

～随筆～

神様と神楽舞う



中江岩戸神楽保存会
会長　佐藤　義勝

こないだまじ、神楽を舞いよったばってんえらい年月がたったなーと思う。タイムスリップした様に「すぎさりし一矢のごとし」と思うと悲しい。二十二才の時じゃった。丁度五十年に成る。「長男じゃき神楽にかたってもらわんと」と皆から云われ覚えの悪さの自分に腹が立ってしょんない五方礼始。平国と二座を教えてもらい、後は見て覚えなんたいと言われて無我夢中じゃった。だれもおらん所で一人でごんじゃったろうかと調子の太鼓を口づさみ又トラクターに乗ってもトラックに乗っても神唄を口づさみ歩く時も棒切れを振り回し、神楽時は欠席もしたこつあ一回も無い。神様んこつじゃけんと一生懸命じゃった。お陰で消防団長も務まり阿蘇郡の支部長まじ務めた。勲章ももらった。皆んなから祝ってもうた。父が時折指導してくれた神楽を舞う時の足どりを。うれしくて、私の長男の弘明も加わり、仕事も家庭も思う様に出来て神様のお陰をしっかりうけた。孫の大地も「俺、じいちゃんのようにヒーローに成る」と神楽面を見ると逃げ回り、散歩しようとついて回り、棒切れを振り回しながら走る。「ちがうちがうこげんたい」と教えると喜び飛び跳ねる。一家四人の神楽舞いが出来る。マスコミにも何度も取材され、テレビ番組も「地上に舞い降りた神々」と文化庁芸術祭参加作品として一時間番組まじ作ってもろうた。波野小学校神楽部二年生から「じいちゃんが先生じゃき一年生の大地君もおるたい」と担任の川崎先生が言うもんで、又休息の時に「大地君舞って見せて」と言うと、棒を振り回し飛んだり跳ねたりするもんで、笑いこけて言葉が出らん。びっくりして「どこであんた覚えたつね」との事も昨日の様に思い出され、もう十年位に成る。今では盛んに成り毎年すごいヒーローが生まれ、中学生のさくらも小学生の楓も神楽一家でにぎやかい。

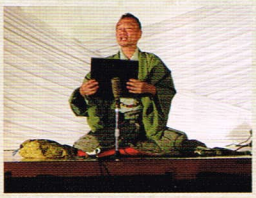
今年は伝統文化振興財団より地域賞を賜り、東京まで表彰に行き、改めてもう舞うことは出来んが教える事は出来る。元気の続く限りはしっかりつなぎ、日本大和民族は神々と共に発展を司どり、今回の大地震も阿蘇の大明神が我が身をつぶしてまでも私達を守ってくれ涙の出る思いである。しっかり神を祀り子供達に教え、阿蘇が我が生れ故郷が発展の里に成る様に、伝統を文化を後世に残す為、今私達は体力の続く限りの夢を追い続けてがんばるばい。

～支えあおう阿蘇・熊本～ 復興祭 開催!!

平成二十八年四月十六日に発生した熊本地震の影響を受け、本年度の文化祭は中止となり、今後の復旧・復興に向け支えあおう阿蘇・熊本をスローガンに「復興祭」を開催しました。

今年も秋晴れの中 佐藤市長始め多数のご来賓と、六百人を超える市民の皆様の来場をいただき、成功裡に終えることができました。オープニングでは阿蘇中央高校書道部による「書吟」が披露され、力強い華やかな幕開けとなりました。

開会式の後は、若者が演じる日舞「花童」、ばってん城次さんの「爆笑肥後にわか」、飛び入り参加してくれた笑福亭鶴笑さんの「落語」、安井まさじ・もっこすファイヤー・ひのひかり智さんによる「よしもとお笑いライブ・阿蘇編」が行われました。よしもとお笑いライブ・阿蘇編では佐藤市長も飛び入り参加され芸人顔負けの演技に会場は大盛り上がりでした。



～随筆～

阿蘇の文化に想う

阿蘇市文化協会
事務局長　小嶋　維男

四年前の水害の時もやはりステージ部門の会員は練習会場が被災者の避難所となり、展示部門の会員は製作途中の作品が流出したりで文化祭は中止、代わりに翌年三月に大庭照子さんたちによる童謡祭を開催した。

噴煙前号で記した通りの経緯で今回は～支えあおう阿蘇・熊本〝復興祭〟を住み慣れた家、地域を離れたり、何かと不自由で過酷な日々を過ごしておられる市民の皆様に癒しのひと時を、お笑いで元気と明るさを取り戻していただけたら、とそんな思いで用意した席六百三十。午後からの開会と好天にも恵まれたこともあり、席はほとんど埋め尽くされた。もともとカルデラの中に人が生活していることと自体世界に希なのである。地震、噴火・降灰被災があって当然のような地域である。有史以来幾度となく大きな災害があったと思う。その度毎にしぶとく生き延びてきた阿蘇人（あそんもん）そこに阿蘇固有の文化が育まれ、そのお陰で今ここに生かされていると思う。

「災難は忘れた頃にくる」とは地球物理学者で随筆家の寺田寅彦の言葉だが、近年では災害の記憶を忘れるどころか、まだ生々しい時期に毎年日本のどこかにやってくる感がある。日本人が今の生活を維持するには地球が二・九個必要だそうで、それだけ地球を消費している現代社会が、災害の多さの一因であるとすれば、今の生活を改めていく必要があると思う。

トランプ大統領誕生で今年はどんな年になるのか、どんなに揺れてもまた揺り戻しは必ずある。人間の叡智によって人と自然と動物が共生する社会、花鳥風月を愛でる農耕民族の一員としての願いである。

第20回
「阿蘇観月茶会」が開催されました！

阿蘇市文化協会主催の第２０回阿蘇観月茶会が９月１７日３００名を超える参加者をいただき開催されました。

午後５時３０分より、お茶席で表千家（管　正子さん、林奈美子さん、岩下久美子さん）による抹茶が参加者に振る舞われ、夕べのひとときをゆるりと過ごしていました。

午後７時からは、小野真由美さんの生け花と阿蘇写友会の写真が飾られた舞台で、La Lumiere によるミニコンサートが行われ、美しい音色を聴きながら中秋の夕べを楽しんでいました。

今年も生憎天候に恵まれず室内での催しとなりましたが、内容的には充実した観月茶会となりました。

阿蘇市文化協会
事務局長
小嶋　維男

新年明けましておめでとうございます。昨年は地震に見舞われ大変な年でしたが、気持ち新たに新春をお迎えのことと思います。昨年は地震の影響か文化祭中止の影響かあるいはその両方の影響か、退会された方が例年になく多く本部役員一同心痛みましたが〝復興祭〟終了後会場の後片付けをしていたら、何も言わないのに学生集団が手伝ってくれるのです。「ありがとう！君達どこから来たの？」と尋ねると「阿蘇中の生徒です。たまたま体育館の前を通ったら大変そうだったので手伝いました。佐藤会といいます。」こんな素晴らしい生徒さんが阿蘇にはいるんです。嬉しくなりました。また入会したい！と思える魅力ある阿蘇市文化協会と文化力による復興を目指し頑張ります。会員の皆様のご支援ご協力をお願い申し上げ新年の挨拶とします。

阿蘇往来 VOL.1

阿蘇の冬は寒い。凛とした寒さである。吐く息の白い尾の長さを楽しみ、霜柱の高さに驚き、乾ききった落ち葉をかさかさと踏みつける感触はたまらない。この阿蘇の地を行き巡り歴史を作ってきた古人がいる。

その一人「丸木政臣」。古人と言っても没年は二〇〇五年であり享年八十五歳である。阿蘇一の宮町で生を受け、青年期まで過ごし、当時多くの青年と同じ様に戦場へ。終戦後は阿蘇に戻り農業に従事した。熊本大学教育学部を卒業後、熊大付属の小、中学校の教壇に立つ。教師人生の出発点となる。その後、東京「和光学園」の校長、理事長などを歴任、その間、一貫して自由な校風のなかでの教育を追求し、国際的に権威あるペスタロッチー賞を受賞した偉大な教育者である。また同時に作家でもあった。氏の作品に「母しゃんの子守歌」がある。この書き出しに「母しゃん、私がいま思い出しているのは、阿蘇外輪山の大観峰の峠で母しゃんと別れた日のことです。」から始まります。氏が五歳の時に、口減らしのため小国の叔父に預けられる場面である。別離の日、荷馬車に乗って早朝に出発、宮地から大観峰まで三里の道を役犬原、中通、山田、内牧などの村や町を通り、ガタゴトガタゴト坂道を上ったと書かれています。克明に描かれる昭和初期の阿蘇の風物詩である。当時の小作農家の貧しさがかいま見えます。「阿蘇の百姓は一生働いて玄米（くろごめ）一俵」とも言われた時代である。作品は氏の幼少期の自伝的小説です。この作品の映画化の動きがあり、筆者は大いに期待していたがいまだ実現していない。氏の教育に関する論文は、丸木政臣教育著作選集全五巻を見ていただきたい。阿蘇市から世界的な教育者が誕生している事を誇りたい。

明治三十二年から昭和十六年まで四十五年間にわたり日本に滞在し、戦争により日本を離れるまでのほとんどの期間を、阿蘇の福祉と幼児教育に人生を捧げた英国女性がいたと言う。この事実は、広く知られぬまま埋もれていた阿蘇の歴史の一片として記しておきたい。

その人の名は「メイ・フリーズ」という。二十四歳の若さでキリスト教宣教師として来日。

当時の日本人の貧しさや生活環境の悪さを、母国英国と比較し、多感な若いフリーズさんは大いに驚愕したに違いありません。人類愛に満ちた平和への架け橋として、四十五年間という一生をかけた阿蘇の生活はどのようなものであったのか。そして一の宮、小国、高森に幼稚園を設立、さらに尖塔に十字架を戴く教会堂を宮地に建設したという足跡は、驚嘆に値する。「草鞋ばきであかぎれ切らして、当時、道のない阿蘇を歩き、次々と幼稚園を作られたフリーズ女史」。今では当時の幼稚園で学び遊んだ幼児も多くが故人となられたと思うが、筆者は阿蘇の地でこれほどの人生を送られた異国の女性に大きな感動と共に、何が彼女を突き動かす力となったのかに興味が尽きない。女史は、終戦の翌年の昭和21年に豪州にて亡くなられた。女史の記念碑が宮地のいずこかにあると聞く。

（記…H・S）

参考文献
丸木政臣教育著作集1～5巻　澤田出版
メイ・フリーズ女史の記録全集　冨田巌編著

教室めぐり

ステージ部門

ステージ委員長代理で展示委員長の岡本さんと泉で二教室を訪問。

三味線『ちとせ会』

１１月２２日、南黒川老人会のサロンを山部ファミリークラブというタイトルで総勢九名で訪問。詩吟・三味線・民謡・舞・フラダンス・ハーモニカ・紙芝居と多演目の発表。サロンの方々も喜んでおられた。

日本舞踊『ぎょくせん会』

１１月２４日、先週までで三施設の慰問が終わり、当日は文化祭で発表予定であった日舞を三曲演奏。次回の慰問の練習となった。

展示部門

『ゆうすげ 短歌の会』

毎月一回（第一火曜日）

身の回りの出来事、自然の変化などなど、感動したことを三十一文字に表わすのが短歌ですが、高齢ともなれば感動も少なく詠草に苦しんでいます。でも、月に一回、みんなの集う日を楽しみにしています。

短歌の会が発足して四十数年。多いときは三十数名もいた会員が今は十数名となり、淋しい会になりました。しかし、何とかして続けたいと頑張っています。

若い方々の入会を歓迎します。

短歌

高空に夫を探せば「居ないよ」と
白き浮き雲たんたんと去る
松本ユリ子

四囲の外輪崩るてもなお棲みており
棚の奥より出す方丈記
市原ふみを

猫と夫同じ寝姿の昼下がり
テレビの都知事の気味よく見ゆ
志賀キヨ子

あるがまま思いのままに生きゆかむ
塀には添わず萩乱れ咲く
大塚　武子

チューリップの球根植えて余りおば
捨てて思えり小さき命
森　トミ

トピックス

阿蘇医療センターで二回の展示会

阿蘇絵画　火曜会

医療センターのご協力で昨年二回、展示をすることが出来ました。多くの方々に見ていただき、感謝しています。

昨年は会員二名が公募に応募され見事入選されました。銀光会展に山野紘三さん、描く力展に関英輝さんのお二人です。他の会員もこぞって応募したいものです。さらなる躍進を目指して！

描く力展 入賞作品
油彩 50 号「早春の阿蘇谷」
関　英輝

銀光会展 入賞作品
「マゼノ渓谷」
山野　紘三

会員募集

阿蘇市文化協会では、平成２９年度会員を募集しています。

いつでも誰でもお気軽に多数の入会をお待ちしています。お気軽にお問い合わせください。

〔連絡先〕
阿蘇市文化協会事務局　☎0967-32-3218（小嶋）

編集後記

皆さんのご協力により、年頭に「噴煙二十二号」をお届けすることが出来ました。

震災の爪痕残る町の姿は、多くの方々の日常を変え、夢を断ち、苦難の生活を強いる状況を現わしています。有史以来、先人たちは阿蘇の地に住み、多くの苦難を乗り越えながら、阿蘇の歴史・文化を形作ってこられました。この先人たちを再発見し、阿蘇復興の力となる事を念じ「阿蘇往来」欄を設けました。多くの方の投稿を歓迎します。

（広報委員会）